

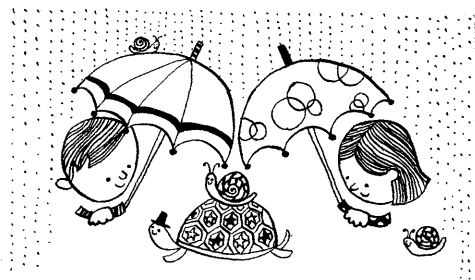
# 実践的研究の面白さと難しさ

無藤 隆

## 実践的研究の広がり

保育・幼児教育の世界においても、しだいに学問的な確立が進んできています。大学院も広がり、そういった専攻が可能どころが増えてきました。実践者の中から大学院に進む人も、かなり出てきています。大学院育ちの研究者にも、現場へのかかわりを通して研究を進めようと努力する人が少なからずいます。ようやく、現場に根ざす研究が可能になりつつあると思います。それはつまり、天分に恵まれた特別な研究者・実践者の感動に満ちた著作というのではなく、一般の研究者が、通常の研究活動で出していく論文という意味です。

とはいえ、まだまだ研究の困難さがあるいろいろな面にあります。いかなる研究も難しいものであり、新たな開拓には陥穽かんせいがつきものだという事情は当然です。



が、それと別に幾つかの問題が散見されるように感じます。それらがダメだということではなく、良さの裏返しとしての問題が残るということであり、その克服がこれからの数年の大きな課題となるという意味です。

### 研究的論文の陥る困難

保育の実践にかかわる研究としては、保育の固有性をいかに組み入れるかが問われるべきでしょう。その点があいまいであったり、時には、保育の問題と無関係のものが見られます。その保育ということは広く解するべきで、制度としての幼稚園・保育所に限定されるべきではないとは思いますが。

心理学なり哲学なり歴史なりを基礎とした研究であるなら、その専門の学会での水準をある程度満たすべきではないでしょうか。とはいえ、境界領域にある研究はそういった厳密な規定からはみ出すからこそ、新たな場を求めざるを得ないし、そこにオリジナリティーも生まれるのですが。

学際性を求めるあまり、拡散してしまっているものも見られます。何もかも総合的にとらえようとして、学問的研究というより、勉強ノートみたいになったり、諸研究の恣意的なつまみ食いになるのです。

逆に、学派的に閉じていて、隘路あいろに入り込んでいるのではないかと観測されるものもあります。引用を見ると、どうやら二、三人の指導教官や影響を受け

た研究者が挙がっていますが、それ以外は存在しないかのような扱いになっています、その学派の顕彰を行っているような論文です。

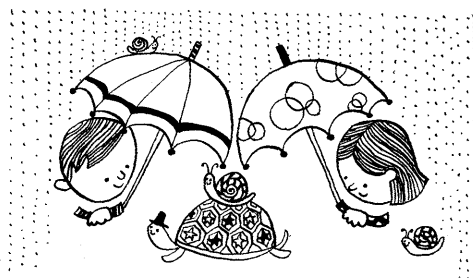
### 実践的研究の陥る困難

実践者ないしその出身の人の書く論文に比較的多い困難な点は、一つは記述に終わってしまうものがあるということです。いろいろなエピソードがあがっており、なかなか興味深いと思っで読んでみると、最後はごくありきたりの「遊びが大切」という類の結論になっていたりします。結論がエピソードの分析から、どう展開されたかが論文の命のはずです。

先行研究の検討が軽視されることが多いのではないのでしょうか。確かにデータベースが完備されておらず、また先行の論文がたくさん種類の学会誌や紀要に散らばっていたり、著作やその章に書かれていて、探しにくいことは確かです。でも、あまりに無駄な繰り返しが多いと思います。

エピソードの記述が面白い反面、時に粗過ぎるのではないのでしょうか。研究を先に進めるためには、ビデオなども通常の実践の際のメモを超えた詳しさと検討することも有益な手立てです。

理論の扱いが、時に単純化されていることも気になります。これは半ば以上、長年研究プロパーでやってきた大学の研究者の責任だと思いますが、その



紹介や議論が充分に丹念なものになっておらず、その簡単なものをさらに単純化してしまつて、実践的論文で議論する傾向を感じます。

### 今後に向けて

以上の苦言めいたことは、決してだから「実践的研究を行うべきではない」ということを意図して書いているわけではありません。その意義を充分に認めただ上で、今後、特に大学院などで勉強し研究をしようとする若い研究者の皆さんに、伝えたいことなのです(なお、若いとはキャリアのことです、年齢ではありません)。

先行する論文や理論をちゃんと探し、たくさんものを読んでほしいと思います。実践について過剰なまでに詳細に至るまで記述することと共に、整合的に上手に説明しようとして、誰かの理論を借りてくる前に、ていねいに自分で考えてみてはいかがでしょうか。いかなる学問にも長い伝統があります。そのすべてとはいわず、少しでも畏れをもつて学ぶべきです。同様に、実践現場にはその事情があり、知恵があります。それをやはり深く探り取るべきだと思つたのです。その先に、実りのある豊かな実践とその研究の世界が開きます。そのために手間暇を惜しまずに、一緒に学んでいきませんか。

(白梅学園大学)